青豆を盗った治助

昔、板戸の村に治助という百姓がおったど。板戸では、あまり田や畑の作物が盗まれるので、みんなで相談したど。そしてその盗人を見つけたら生き埋めにしてしまうことにしたど。そしれば後からは、これにこれで盗む人がいなくなると思ったど。

盗人を生き埋めにすることにしたその年は大変なけかち（凶作）になったんだど。治助は朝暗いうちから起きて、夕方暗くなるまで働く、働き者であったけど、家内中の食べ物がなえぐなったので、ついつい与兵宇畑から青豆を二束ばかり盗んでしまったど。

それをおべだ村の人たちは大変にごしゃえで、大の男五人がかりで治助をつかまえで、

「なんぼ働き者の治助でも人の物を盗れば盗人だ。みんなで相談したように生き埋めにしてやる」

といって穴を掘りはじめだど。そしたば治助が、

「おれが食うために盗んだなでね、おれには七人もわらしがえで食い物がなくてあまりに泣きさがぶので、悪いことはわがってえだが、村の人たちは「でげね、約束どおりにしる」といって頼んだが、ついつい手を出してしまった。何とが助けでけれ」

観念もした治助は、穴のそばに置えでだ「バラ」と「石」を指さして、「これだけは、おれと一緒に埋めなえでけれ」と頼んだけど。村の人たちはこれも聞き入れでけねえけど。そして、とうとう「バラ」を下に敷いで、やんかがる治助をみんなして穴の中さ投げでやったど、したば治助は大きな目から大つぶの涙を流し、大きな口をして、

「えま、おれに手を掛けだ者五人の家の屋敷をよもぎ原へしてける。おれが青豆を盗ったことをみんなに知らせだ与兵宇をえじまでもうらんでける。また村でなえが（催し事）ある時は、なえがかえが（何らかの形）でたたってやる。そして俺の田んぼさ鍬を入れた者にもなんでかんで（必ず）たたってける」

と言い残し、上からわらわら（どんどん）投げ入れられる石の下にされて埋められだんだど。

――というわけか、元奥宮小学校の運動会が喜膳野で開かれた時にはよく雨に見舞われていたもので、古老の語るところによれば「三粒降るにしても必ず雨が降る」と。

いまでも「治助ひら」といって治助が埋められたと言い伝えられている場所があるし、治助田という田んぼ跡には「葬」が繁って、治助を偲ぶように風に吹かれている。

この村史は、本村始まって以来の体系的な通史である。村民各位には折にふれてひもとき、話題とし、村民としての自覚を一層高めると共に、誇りをもち、郷土の発展に寄与する心の糧となることを願うものである。

終わりに、編集委員各位、監修者、編集指導者の諸先生、県立博物館・県立図書館・湯沢図書館、村内外からご指導・ご協力をいただいたかたがた、貴重な資料や写真を提供していただいたかたがた、文献など引用させていただいたかたがた、また親身になって編集校正、制作に全面的にご協力くださった秋田協同印刷株式会社ならびに秋田文化出版株式会社に心からお礼申し上げ、編集後記とする。

平成五年（一九九三）三月